

2-4 ことばを紡ぎつなげる「多文化共生」フォーラム～手繰り寄せてつくる相互理解～

(1) フォーラムまでの道のり

本格的なフォーラムの準備は9月に実施した第3回合宿から始まった。プロジェクト参加メンバーが主体となって企画・運営を行うフォーラム。メンバーたちは、「皆さんの好きなようにフォーラムをつくってみてください」というお題を渡され、ほぼ白紙の状態からフォーラムの企画をスタートした。第3回合宿ではまず、フォーラムの目的や対象を決定するところから始まった。それぞれのメンバーからさまざまな意見が出たものの、多くの意見を取り入れようとすればするほど、フォーラムの方向性を絞り込むのが難しくなった。この合宿では、フォーラムを企画する上で最も重要と言っても過言ではない、フォーラムを行う目的を中心に議論した。限られた4時間半のフォーラム



フォーラムのチラシ

準備時間のなかで、「外国にルーツを持つ当事者の孤立を解消するための繋がり・結びつきの必要性」をテーマにフォーラムを実施することにメンバーたちの意見がまとまった。

議論では、日本社会における、当事者が居場所と感じられる場の欠如や、行政・教育機関等の地域基盤と当事者のつながりの薄さ、地域コミュニティにおける相互理解の不足が問題点として挙げられた。これらの現状の改善に社会全体が一步を踏み出すきっかけとなるフォーラムをつくり上げていこうという考えで全員が一致した。また第3回合宿では、フォーラムの主な対象を行政・教育関係者にすることに決めた。当事者が日本で暮らすなかで関わる頻度の高い、行政・教育機関に従事する方々に当事者の声を届け、対話を持ちかけることで、外国にルーツを持つ人々が当たり前に社会の一員として生活できる社会システムの形成を期待した。そして、フォーラムではメンバーたち自身を「多文化共生」問題における「当事者」と位置づけることで、「行政」、「教育」、「当事者」の3つのグループが対話を通して理解を深め、当事者が日本社会から排除され孤立している状態の改善に向けた何らかのインパクトを残したいという考えにまとまった。

第3回合宿後には、フォーラムのチラシ作成、出講いただく講師の決定、広報方法の決定、ホームページの作成、フォーラムの内容の詰め等、多くの To Do があった。第3回・

第4回合宿の中の限られた時間だけでは準備を終えることが難しく、合宿外でも2時間程度のオンラインミーティングを20回行った。オンラインミーティングであったこと、そして学校や仕事の都合で毎回の参加が難しいメンバーも多く、合宿外で決定した事項に関しては全員で統一した認識を持つには難しさがあった。またオンラインでの会話時に生じる独特な「間」も個人的にはあまり好んではおらず、議論の際、その「間」がこれまで合宿でメンバーと対話する時に感じてきた居心地のよさを邪魔しているようにも感じた。このような多少のやりづらはさはあったものの、ロジ表や共有メモなどの作成を行うことで、参加できなかったメンバーや聞き逃しがあったメンバーの事後フォローをできるように工夫した。

<合宿外で実施したオンラインミーティングの日程とそこで議論した内容例>

ミーティング 実施日	主な議論の内容
①10月21日	フォーラムタイトル/今後の To Do/参加者の集め方
②10月25日	メンバーの呼称/チラシ/時間配分/ゲスト
③11月3日	メンバーの呼称/チラシ/ゲスト/役割分担
④11月4日	ゲストにお願いする内容とその目的
⑤11月10日	チラシ/各役割の宿題/内容の主な流れ/後援団体について
⑥11月11日	ゲストとの打合せ日程/共生スポークスパーソンの定義
⑦11月16日	共生について話す場の必要性/ゲストの講演内容/ディスカッションの目的と実施方法
⑧11月18日	ディスカッションで取り上げたい内容/ワードクラウド
⑨11月23日	ディスカッションで問いかけたいこと内容/各タスクの確認
⑩11月25日	共生スポークスパーソンの発表で伝える内容/申込みフォーム
⑪12月2日	当日の全体スケジュール/理想とする共生とは
⑫12月6日	ディスカッションクエスチョンの選定
⑬12月9日	共生スポークスパーソンの発表で伝えたいメッセージ
ラボルテ氏 打合せ	講演内容/当日の流れについて
⑭12月16日	「多文化共生」という言葉に対して思うこと
今井さん 打合せ①	ファシリテーションをお願いする部分/当日の流れ
⑮12月21日	共生社会の実現に向けて提案したいアクション/発表したい具体的なエ

	ピソード
⑯1月8日	共生スポークスパーソンの各メンバーが用意した発表内容の擦り合わせ
⑰1月10日	ディスカッションクエストの再考/ワードクラウドの質問
⑱1月11日 対面リハ	当日の運営の動き方/リハーサル of 反省
今井氏 打合せ②	ファシリテーションパートの再考/成果報告会と共生スポークスパーソンの発表予定内容に対するコメント
⑲1月13日	発表内容の仕上げ/ディスカッションの質問の最終決定
⑳1月17日 オンラインリハ	通しリハーサル/当日の動きの確認/事後アンケートの作成

こうして表でミーティング中に議論した内容の流れ振り返ってみると、反省点がたくさん浮かび上がってくる。ミーティングの数日前に議題を提示できていれば、もっと効率よく意見交流ができたと思うし、もう少し計画的に期日を決めて **To Do** をひとつずつこなしていたら、議論の話題があちこちして混乱するというのは防げたと思う。そのほかにも「～やっておけばよかった」と思うことはたくさんあるのだが、フォーラムを終えて強く感じたことがある。それは、プログラムを自分たちで運営・実施するという経験がほぼない共生スポークスパーソンたちが、試行錯誤しながらも、思いを届け共生の実現に少しでも近づきたいという共通の目標のもと、仲間と協力しあって一生懸命に頑張れたことである。メンバーそれぞれ個人の事情や考えがあり、どれだけ物質的にフォーラム運営に貢献できたかは異なると思うが、フォーラムを終えて「やりきることができた」、「精一杯を出し切れた」、「楽しかった」と感じたメンバーが1人でもいたら、大変嬉しく思う。

フォーラム準備にあたり、勤務後の夜にミーティングがある時も含め、ほぼ全てのオンラインミーティングに参加し、私たち共生スポークスパーソンたちをずっと見守ってくださった晴日さん(櫻木さん)には感謝の気持ちでいっぱいである。共生スポークスパーソンたちの議論がよくわからない方向にってしまった時や、フォーラムの計画を立てる際、私たち自身で答えを探せるような方法でアドバイスや問いかけをしてくださった。私たちの議論を客観的に捉えてコメントしてくださる晴日さんの存在があったからこそ、錯綜した時もすぐに一步引いて冷静に考えることができたのだと思う。

また、唐突な出講依頼にも快くご承諾いただいた、きよぽんさんとラボちゃんさんの心温かいサポートにも心より感謝申し上げます。きよぽんさんには、第2回合宿でパネルディスカッションのファシリテーターとして出講していただき、ラボちゃんさんには、第3回合宿に出講していただき共生に必要な社会資源について幼少期のエピソードをもとに語っ

ていただいた。フォーラム前にお二方それぞれにご参加いただいた打ち合わせでは、事前にはあまりはっきりとした説明ができなかった中、共生スポークスパーソンの意図を汲み取り、親身になってフォーラムの実施方法等について一緒に考えてくださった。お二方には、フォーラム実施の直前までご助言を賜り、共生スポークスパーソン一同、深く感謝申し上げます。

(曾 祢 メラティ)

★フォーラム準備を振り返って-野津 貴哉-★

フォーラムの準備はゆっくりと始まり、学習や対話が中心だった。そこで仲間との関係も深まった。しかし、後半からは私たちが発信する側になり、忙しくなった。合宿中にフォーラムの内容を議論したが、論点が散らばり、一つの発表にまとめるのは大変だった。結局、合宿中に発表内容を決めきれず、オンラインミーティングに持ち越した。しかし、オンラインでは作業の難しさに加え、全員が揃うのも難しかった。私も大学の課題が忙しく、何度かミーティングを欠席してしまった。そのたびに申し訳なさを感じた。こうした困難はあったものの、フォーラムの準備で楽しかったことも多かった。例えば、何気ない会話や温泉、アイスブレイクのゲーム、一日の終わりの飲み会などが挙げられる。なかでも特に印象深かったのは、本音をさらけ出して語り合えたことだ。本音で向き合えたからこそ、普段以上に深い議論が展開できた。合宿のメンバーは皆、社会の現状に対して何らかの違和感を抱いて参加していた。日常生活では、真剣な話題だと思ったことでも一笑に付されたり無視されたりすることはある。しかし、この合宿ではそのようなことは一切なく、その点が非常によかったと感じている。



(2) フォーラム内容

①「共生を願う若者が今伝えたいこと」(共生スポークスパーソン)

共生スポークスパーソン 「共生を願う若者が今伝えたいこと」 語録

- ・共生について対話を重ねるなかで、社会にある問題点や今後の展開を議論する前に、「多文化共生」という言葉そのものの背景にある意味や言葉の使われ方を話し合うことが大事だと思った。
- ・私たちが目指す社会は今の「多文化共生」の言葉では伝わらないと思う。「多文化共生」は目指すべきゴールではあるが最終的なゴールではない。あくまで一つのチェックポイントである。さらに進歩した「多文化共生」社会を目指している。
- ・「多文化共生」に代わる言葉や要素を箇条書きでは出せたが、それを新たな「多文化共生」として定義する、文言にすることはすごく難しかった。
- ・ルーツはアイデンティティに関するひじょうにプライベートでセンシティブなものだが、不均衡な力関係のなかで、マジョリティが一方的にこれを消費している。マジョリティから勝手な期待を寄せられ、その期待に応えられないとがっかりされる。
- ・教科書で「街なかで外国人に英語でインタビューしよう」といった発展課題を目にすることがあるが、外国人であることをなにごとで判断しているのか。仮に外国人であっても英語圏出身とは限らないにもかかわらずインタビューが成立している本文。無自覚の偏見が表れている。これが教育現場にあることが問題。
- ・日本での差別や「多文化共生」の問題をテーマにしたディスカッションや映画の上映はあまりみかけない。日本には差別がないという観念を植えつけるかもしれない。日本の「多文化共生」の問題を取り上げるイベントが必要では？
- ・必要な支援を求める行動は躊躇してしまう。自分から助けを求めに行きづらい。自分から行動しないと自分の権利を守れないことに問題がある。
- ・在日コリアンの歴史をみると、基本的な権利は当たり前のものではなく勝ち取ってきたものだとわかる。
- ・日本の人は本当の意味での差別を知らないのではないか。コロナのとき、平然と外国人お断りの看板を出している店があった。国内での差別に気付いていないと、海外で自分たちが受ける差別についても考えることができないのでは？
- ・見た目で判断したら、自分も見た目で判断されないように努力しないといけなくなる。差別を減らすことは同調圧力を減らすことになる。こう話すとより多くの人に重要な問題だと思ってもらえる気がする。

- ・ **ルーツ以上の違いを受け入れてほしい。** 違いを喜ぶことが本当の共生。みんな違うから面白いということを経験した。
- ・ 居場所には足りない視点がある。与えられるものではない。お互いのパーソナリティを認めて対話を重ねることで得られた力がある。みんなになら自分が思う社会の不満を話してもいいんだと思える居心地のよさが生まれた。
- ・ **バックグラウンドがさまざまな人と関わる機会がない。** モヤモヤや不満を口にする機会や相手は、特に外国ルーツの人にこそ不足している。
- ・ 共生社会を築くためには**マクロな視点で課題を解決しつつ、一人ひとりが具体的なアクションをすることが必要不可欠。**
- ・ 新しい言葉を使ったり、既にある言葉を再定義する必要がある。新たな概念や価値観を広めていく。



共生スポークスパーソンの発表の様子

「共生を願う若者が今伝えたいこと」発表資料

共生を願う若者が 今伝えたいこと

2025年1月18日(土)
ことばを紡ぎ繋がる「多文化共生」フォーラム

目次

1. 共生スポークスパーソンとは
2. 「多文化共生」の問題
3. 共生の概念や問題点
4. 前々プロジェクトで感じた私たちの新たな「居場所」
5. 現代社会の「共生のあり方」に対するモヤモヤ
6. 背景
7. 今後の展開

共生スポークスパーソン

・共生を願うという共通の目的意識のもと
集まった合宿メンバーでつくった新しい

ことば

・スポークスパーソン

＝団体の意見発表の担当者、また、代弁者

・当事者の声を社会に届ける、

能動的に共生について考え、周りを巻き込んでいきたいという思いを込めた。

・当事者の声が届きにくい今の社会で、そこに感じるもやもやを共有できる仲間や共生についてフランクに語り合える仲間の輪を広げたいという思いを持っている。



「多文化共生」の問題

本プロジェクトを通して、私たちが思う共生や居場所について対話することができた。

日本における共生の歴史や自分の経験を振り返りながら、今の社会や不平等・不公正、言葉の重要性について語り合った。

→ そこで、何気なく使っていた「多文化共生」に違和感を感じるようになった



「多文化共生」は今の社会かつ私たちの理想の共生社会に合っていないと判断し、様々な「当たり前」に疑問を持つ様になった。

1. 「多文化共生」と現実世界の間にギャップがある
2. 私たちが目指す社会は今の言う「多文化共生」社会ではない
3. 言葉が先走ることがある
4. 私たちは「多文化共生」は目指すべきではあるが、その先の社会を目指したい

「当たり前」?



言葉を変えて、 社会を変える

「多文化共生」のような普段使っている言葉をクリティカルに考えることで、より包括的な社会を築く一歩になると感じている。

1. クリティカルに考える重要性
2. 私たちは参加者や行政の方、教育機関の方、外国にルーツをもつ方々と対話をし続けたいと感じている
3. 年齢、職場、学校、人生のあゆみに関係なく、対話ができる場または居場所を築きたいと感じている



共生の概念に対する問い と 私たちの思う共生

総務省の取り上げた3つの「多文化共生」

多文化共生

多文化共生における共存

多文化共生における共生

多文化共生(総務省)

- ・国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合う
- ・対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと

多文化共生における共存(総務省)

国籍や民族、性別など背景
が異なる人々が同じ場所に
存在していること

多文化共生における共生(総務省)

国籍や民族、性別といった背
景が異なる人々が共に関わり
合って生きること

3つの「多文化共生」

~~多文化共生
多文化共生における共存
多文化共生における共生~~

多種多様な人たち

形作る難しさ



具体性がない

出し方



方向性が曖昧

視点が抜けている
現実味がない

私たちの思う「多文化共生」の概念

決められた文化はない、変化しながら文化が形成される

一緒に共存するだけでなく、どのように認識するか(人、性格)が大事
→ただ過ごすだけではない

みんな違うから面白い

理解できなくても良いが、拒絶はしない社会
→理解する試みが必要。

「多文化共生」という言葉には・・・

問題がある。流通している共通の言葉
「多文化共生」がある。
これに代わる言葉がない。
見つけることが出来なかった。

でも私たちは・・・

- ・多様な人含む
- ・文化は変化し、変化し合っていく
- ・「多文化共生」の言葉を
新しくする観点を持ち、扱う

現代社会の 「共生のあり方」 に対するモヤモヤ

教育現場でのモヤモヤ

・第一言語が日本語であるにも関わらず、不必要的説明を受ける

⇒画一的な「日本人」像

・～の言葉で話してみよう！

⇒個人の「ルーツ」のモノ化

・スピーチコンテストで出自を確かめられる

⇒個人の努力や苦勞の矮小化



◎画一的な「外国人」像
外国＝欧米諸国・英語



街行く外国人に
英語でインタビューしてみよう！

先生は親の次に深く関わる
第二の「大人」代表

行政機関の「多文化共生」に対する方針

「神戸市外国人に対する不当な差別の解消と
多文化共生社会の実現に関する条例」(2019)

第1条 市は、国又は関係機関との連携により、外国人に対する不当な差別の解消の必要性について、市民に周知し、その理解を深めることを目的とする広範その他の啓発活動を実施するとともに、そのために必要な取組を行うよう努めるものとする。

2 市は、国籍や民族の違いを問わず、全ての人がお互いの違いを認め合う多文化共生社会を実現するという観点に立ち、多文化共生の基盤となる人権啓発を推進するよう努めるものとする。

(情報提供)

多文化共生の地域づくり

- ・多文化共生についての市民理解の促進
- ・生活ルールについての理解促進
- ・差別意識及び差別的行動の解消に向けた啓発
- ・外国人コミュニティやボランティア団体等が活動しやすい環境づくり
- ・外国につながる市民が活躍できるまちづくり
- ・外国につながる市民の意見が行政に届く仕組み
- ・公務員への採用

「大阪市多文化共生指針
(概要)」(2024)

「外国人」という表現

→多様なルーツを持つ人々が対象から外された取り組みになっている
(e.g. 日本国籍を持っていても母語が日本語でない人々、帰化した人々)

「神戸市外国人に対する不当な差別の解消と多文化共生社会の実現に関する条例」(2019)

第2条 この条例において「外国人」とは、出入国管理及び難民認定法(昭和26年政令第319号)第2条第2号に規定する外国人であつて、適法に居住するものをいう。

(市民の責務)

出入国管理及び難民認定法(昭和26年)第2条第2号

(定義)

第2条 出入国管理及び難民認定法及びこれに基づく命令において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 外国人 日本国籍を有しない者をいう。

行政機関の「多文化共生」に対する方針

「神戸市外国人に対する不当な差別の解消と
多文化共生社会の実現に関する条例」(2019)

第1条 市は、国又は関係機関との連携により、外国人に対する不当な差別の解消の必要性について、市民に周知し、その理解を深めることを目的とする広範その他の啓発活動を実施するとともに、そのために必要な取組を行うよう努めるものとする。

2 市は、国籍や民族の違いを問わず、全ての人がお互いの違いを認め合う多文化共生社会を実現するという観点に立ち、多文化共生の基盤となる人権啓発を推進するよう努めるものとする。

(情報提供)

多文化共生の地域づくり

- ・多文化共生についての市民理解の促進
- ・生活ルールについての理解促進
- ・差別意識及び差別的行動の解消に向けた啓発
- ・外国人コミュニティやボランティア団体等が活動しやすい環境づくり
- ・外国につながる市民が活躍できるまちづくり
- ・外国につながる市民の意見が行政に届く仕組み
- ・公務員への採用

「大阪市多文化共生指針
(概要)」(2024)

人権啓発活動

→市民が日本社会における「多文化共生」問題についてイメージする、理解を深めることが難しい

(e.g. 海外の「人種差別」をテーマにした作品の上映)



「多文化共生」の取り組みやイベントでよく目にする

「異文化の3F(Food, Fashion, Festival)」

→外国にルーツを持つ市民が直面する差別や困難を十分に伝えきれていない??



自己申請主義

→自ら助けを求めに行かなければ受けられるはずのサービスを受けられない (e.g. 生活保護申請)

「当事者」の声が届きにくいシステム

→言語の壁、情報の伝達不足、

「多文化共生」施作の企画・運営における当事者の不在



背景

たかや ひまわり

歴史（在日コリアン）

1. 終戦 1945
 - a. はじめは解放された民族と捉えられる
2. 冷戦の進行、朝鮮戦争
 - a. GHQと日本政府は「治安維持」のため、在日コリアンを管理的対象にする
3. 阪神教育闘争
 - a. 日本の学校で民族教育の禁止
 - b. 朝鮮学校閉鎖命令
4. サンフランシスコ平和条約
 - a. 在日コリアンは納税義務がある
 - b. しかし、国籍とそれに伴う保険や選挙権は剥奪

日本のマイノリティーの歴史を教えない問題

日本の教育で差別を取り上げる時

1. 在日コリアンは日本での差別について考える格好の例
2. 在日コリアンの歴史は植民地主義や、日本の米軍基地問題、アジア人が海外で受ける差別について批判的に考える機会になる
3. 海外の例ばかり取り上げると日本国内で差別がないと勘違いされる
 - a. 逆に差別を助長する
 - b. 現に苦しんでいる人が無視される
4. 外国ルーツの人の歴史を隠すことは同じ国に住む人間としての尊厳を軽視している

差別が再生産され続けているのはなぜだろうか？

● 総務省「多文化共生」の定義&学校教育

→日本の植民地主義や運動についての事実が排除されている
(今は、共生を妨げるのは日本語が話せないからや、日本文化に慣れていない、知らないからだという考えがベースになっている)

● 政府に「移民政策」がないこと

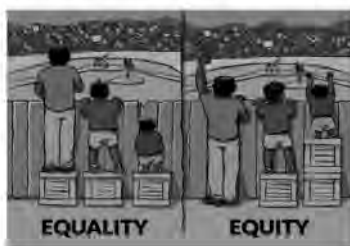
→家族を連れて来れない・ビザを失う不安・国籍による仕事面での制限

● メディアでの偏った「外国人」の表現

⇔「日本人」像の当たり前さ

波風をたてないことは生きづらさを許容し、
未来の世代にもこの生きづらさを繋げることになる

不平等と不公正



不平等＝同じものが与えられていない状態

EX)人権、雇用の機会など

不公正＝同じものが与えられてもなお、損する人がいる状態

EX)機会が同じでも、日本人男性が最も好まれる

今はどちらも存在するが、
目指すところは公正

「共生」が必要な場面は、人種や国籍などの「多文化」に限ったことではない

- 「共生」とは、様々な背景を持った人がともに生きることであり、ジェンダーアイデンティティなどにも言える

- 「みんな違う」から「面白い」
- 生きづらさを許容しない！→公正を目指す

私たちが合宿で共有した生きづらさ＝ 「共生」を考える原点

それは...

- 持って生まれたものによって差別されることへの疑問
 - 個人の努力の有無や程度ではないことでの差別への疑問
- 公正性を求めるための知識、想像力

紡ぐプロジェクトで見つけた私たちの 新たな“居場所”の意味

”居場所”と聞いて思い浮かぶものは？ マイノリティにとって必要な“居場所”とは？



家？



学校？



職場？
働く場所？

私たちが見つけた

“居場所”の定義

- ・ 国籍や外見で判断するのではなく、その人が
 どういう人であるかを見てもらえる
- ・ 「安心できる」「ほっとする」だけでは終わらな
 い、自分たちで見つけ、同じ目的を持って行動し
 ていくことができる(能動的)



この定義が全てではな
 い！

居場所に対する考え方は
 それぞれ違って良い！

自分を知ること

お互いに歩み寄れた

→ 居心地の良さに繋がる

自分のこれまでの経験、共生に対する違和感を共有

→ お互いを知ろうとする姿勢



居心地の良さに繋 がる対話の重要性

対話を重ねることで、自分たちの価値観、
 共生に対するモヤモヤを言葉に
 して明確になった



能動的な場所

自己理解できる場所

紡ぐプロジェクト合 宿

Third
place



自己発信できる場所

Safe
space

共生社会においてなぜこの“居場所”が必要なのか

- ・バックグラウンドが違う人たちが関わり合い、自分を認め、お互いが歩み寄れる場が少ないから
- ・自分が抱える社会に対するもやもやを口にする機会になるから(タブー視されている傾向がある)
- ・外国にルーツを持つ人にとって、社会的に様々な人と関わる機会が少ないから(日本にいる人みんな)

今後の展開

共生社会の実現のために、私たちに必要な第一歩

- ❖ ファーストアクション・社会活動の必要性→どんな小さなアクションをでも変化は起きる
- ❖ 私たちの行動・思いがもみけられないようにするには？次に繋がるようにどうする？
- ❖ 次の世代だけに押しつけず、皆で考えるにはどうする？

キーワード

- ファーストアクション: 集った社会課題に対して最初の一言を踏み出す行動
- 社会活動: ファーストアクションやソーシャルアクションとは、社会課題に気づき、自分にできる行動を起こすことです

私たちが目指す社会と実現方法

- 外国にルーツを持つ人々への平等・公平環境具体的になっていいと思いますに
 - 外国にルーツを持っている方や帰国子女、帰化者→チャンス
- 担い手として動く
 - 行政に対してカウンタープライキではなく、担い手として→居場所や作る生産者として動く
 - 草の根から実際活動していく
 - 最前線で戦い、自分達で新たな社会を作り上げる

今後の展望(手伝って欲しい所)



ことば

共生の代案
例: 共生スポークスパーソン



セーフスペース

・社会から孤立している方へのスペース
・新しい当たり前に基盤に
・押し付けではなく、皆が気軽に安心して話せる場



行動

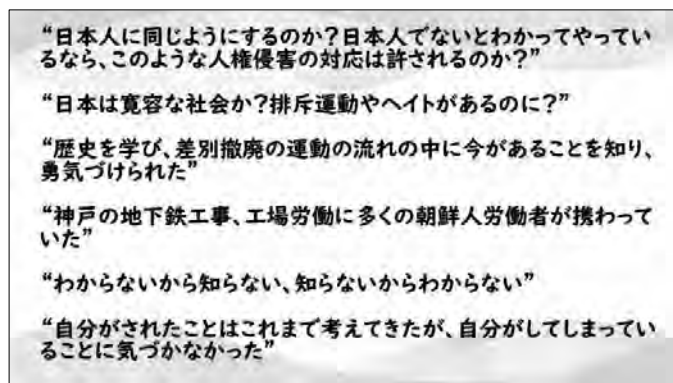
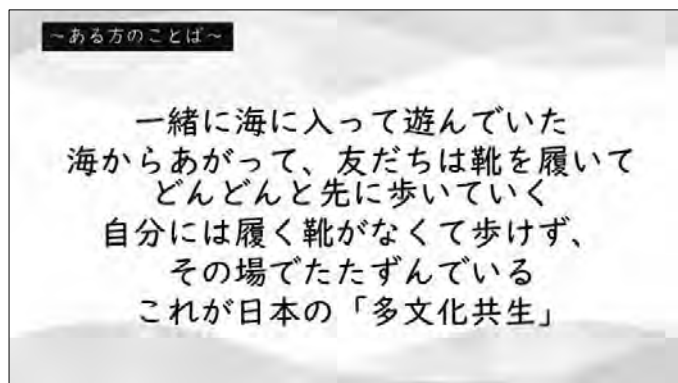
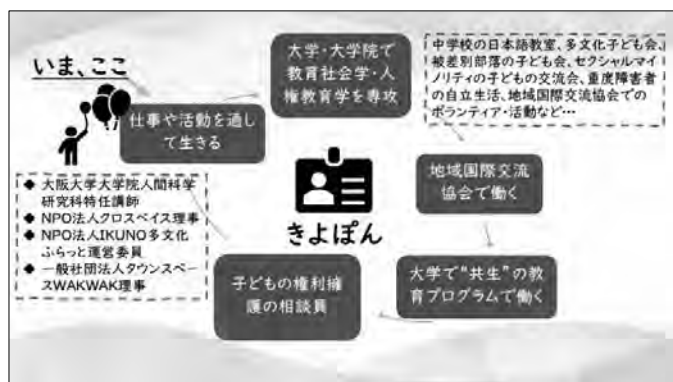
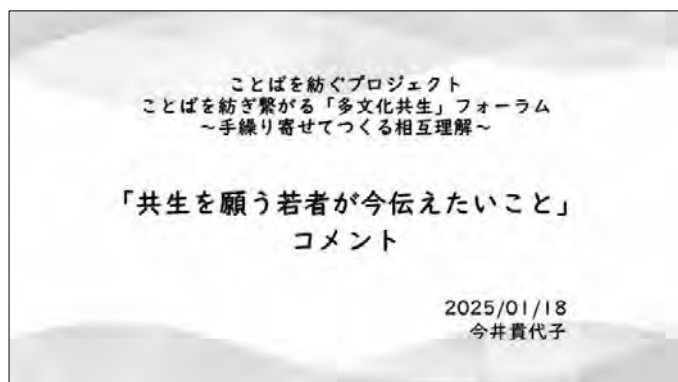
行政や教育機関
・民間が創造し、行政が補う
→ 共生スポークスパーソンの活動を財政的に支援
→ 活動場所の提供
→ 勉強会などに参加

まとめ～私たちの思い～

共生とは、人との接し方を見直し、他者の視点に立つことから始まります。私たちは、必ずしも自分を既存の категорияに当てはめる必要はなく、それぞれの多様性を尊重しながら共生する社会を目指せるはずです。日本の共生社会においても、同じ芯を持つ仲間と手を取り合うことで、変化を起こすことが可能です。外国にルーツを持つ人々や次世代の子どもたちがより恵まれた環境で生きられる社会の構築は、私たちが出来ることだと思います。

②「共生を願う若者が今伝えたいこと」へのコメント(今井 貴代子氏)

- ・「自分だけの問題ではない」と気付いたプロセス。差別をなくし人権が守られるためのプロセスをつくっていかうよと言っている。
- ・当事者のニーズにあった取り組みをしていますか?当事者の声を本当に聞いていますか?地域における課題を考える場をつくっていますか?
- ・二つの意味で歴史のことに触れている。一つは日本の歴史の負の過ちに学ばなければならない。もう一つは差別・レイシズムに闘ってきた歴史、社会運動の歴史に勇気づけられたということ。
- ・社会モデル。マジョリティ中心の社会がバリアを生み出している。当事者と一緒に対話をしてバリアがある場所、社会を変えていかう、と言っている。生活の場で声を聞こうと言っている。
- ・言葉と目指す社会像にはギャップがある。でも、その言葉を使って自分の言葉に変えて対話しよう。「私の言葉ではないけど、それを使って一緒に変えていかう。アライになろう。価値を生み出す場を一緒につくりましょう」というメッセージ。



“自分は何もできない、仕方ないと思っていたが、「なんかおかしい」と、次の一歩を進める場があるとしたらこれだ”

“社会全体で「おかしい」と言える社会をつくりたい”

“一人ではないと伝えたい”

“少し変化をおこすと、何かが変わるかもしれない”

“教室から始めるみんなが多文化に触れる場”

“アートや表現、感覚は大事、その経験は後に残る”

“しんどいがやめたいとは思わない。意義があると思っているから。新しい価値を生み出している”

“納得しないズレがある。その距離を大事にしたい”

共生スポークスパーソン からの呼びかけ

- 『『多文化共生』と現実世界の間にギャップがある』
- 「参加者や行政の方、教育機関の方、外国にルーツのある方々と対話をし続けたい」

①自分だけの問題ではなく社会の問題 「個人的なことは政治的なこと (the personal is political)」



個人のモヤモヤの経験

- ・文化本質主義的・画一的な「日本人」像、「外国人」像
- ・3F、「ルーツ」の消費
- ・個人の努力や苦勞の矮小化
- ・経済的有益さでの評価



社会の不平等・不公正の問題

- ・法律や方針・指針など制度的に埋め込まれている
- ・日本の植民地主義や人種差別の歴史に根差している
- ・非対称性・自己責任・自助努力

～展望～

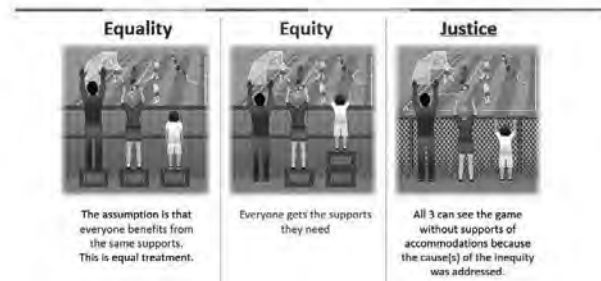
差別をなくし人権が守られるためのプロセス

- ・当事者（外国にルーツをもつ住民）のニーズにあった取り組み
- ・地域における「多文化共生」の課題や可能性について住民が理解を深め、地域コミュニティを築くための場づくり
- ・日本のマイノリティの歴史から学ぶ機会



②社会モデル：公正・対話・人権の視点

- ・マジョリティ中心の社会のあり方がバリア（社会的障壁）をつくっていて、そのバリアを取り除くことは全体の責任である（松浪2024*『社会モデルで考える』ためのレッスン）
 - ・マジョリティとは「気にせずにすむ人々」（ケイン2019*『ふれる社会学』）
 - ・マジョリティにとって「特権」は「透明の自動ドア」（出口真紀子）
- ・社会環境を変える＝「合理的配慮 (reasonable accommodation)」＝対話
 - ・「私たち抜きで私たちのことを決めないで (Nothing about us without us)」
- ・出入国管理政策はあるが社会統合政策はない。外国人の権利や差別禁止の理念法がないことの問題性
 - ・権利擁護・差別撤廃運動の歴史、生活の場で紡がれる小さな声



OECD(2018) "Equality in Education"

③「(多文化) 共生」との対話とアクション 「ことばを変えて、社会を変える」

「これは抑圧者の言語
でも、それが要るのだから
あなたと話すためには」
(アンドリエヌ・リッチ)

- ・アライ (ally: 仲間) になる＝連帯
 - ・“一人ではないと伝えたい”
 - ・“差別撤廃の運動の流れの中に今があることを知り、勇気づけられた”
- ・対話 (居場所)＝異なる声、異なる立場、交差性
 - ・“しんどいがやめたいとは思わない。意義があると思っているから。価値を生み出している”
 - ・“「なんかおかしい」と、次の一歩を進める場があるとしたらこれだ”

開いたドアを押さえておこう。
私がドアを開けておくから、
どうぞあなたも入ってきて。
そしてこの先やってくるみんなのために、
ドアは開けたままだにして置いて。



『人種差別をしない・させないための20のレッスン』(ティファニー・ジュエル著
オーレリア・デュラン イラスト きくちゆみこ 訳、2022年、DU BOOKS)

③『共に生きる社会』の実現に向けて」（ラボルテ 雅樹氏）

ご紹介たまわりました、ラボルテ雅樹と申します。よろしくお願いいたします。

私自身今やっていることですが、一つは、労働組合の活動を長らくやっています。いわゆる賃金未払いであるとか、ハラスメント被害を受けたであるとか、有給がとれない、あるいは職場にいられない。働き続けたいけれど解雇されそうになっている。そういった課題にささやかながら取り組んでいます。

二つめに国際交流協会で、相談員という立場で外国にルーツを持つ人たちの相談対応に従事しています。

三つめに、生活困窮をはじめ社会的排除などの課題に関する対人援助職に従事しています。

私はフィリピンにルーツを持っています、今 30 代です。実は今日あえて私はパワーポイントを用意していません。ずっと私が想像していたのは、皆さんが大事なお話をしてくださって、そのところからある種、私自身の引き出しを言葉にしてみたいなあと。パワーポイントに話すとなかなか大変なんですね。サボっていたわけではありません。私は意図的に用意しないでおこうと思って。実はスポークスパーソンの皆さんとは、去年、合宿で対話する機会があって、すごくすごく嬉しくなったんです。嬉しくなった。大事なことはもう先に話してくれたという感があります。

共生という言葉、「共に生きる社会の実現に向けて」ということで賜っているんですけども。少し嫌な形で、皆さんに伝えたいなところがあります。仮に私が 10 代前半。10 代前半だった頃の私が、学校の教室にいて、「これから共に生きる社会の実現に向けて」という授業をしますとか。「共生にむけて」ということの授業をしますと言ったときの私の反応です。私が私の子どもだった頃の反応を思い出しますけれども。ごめんなさい。悪い言葉です。へどが出る。申し訳ない。へどが出る。胡散臭い。聞きたくない。多分私は、どういう反応を示すか?寝ると思います。その授業のなかで。聞きたくないから。遮断する。私が 10 代前半だった頃、学校のなかではそういう反応を示していたかもしれませんけれど。私が家に帰ってきて、夜たとえば 9 時、10 時。自分の部屋があったんですけども、自分の部屋に戻って、過ごしていて。壁の向こうから、どういう声が聞こえてきたか?母の嗚咽、鳴き声。あえて特殊な表現します。弟の父親。私異父兄弟なんですね。妹と弟がいますけれども。異父兄弟です。弟の父親から、母に対する暴言。暴力。壁の向こうから聞こえてくる、あえてもうどういう言葉がでてるか。私は話しませんけれども。その言葉を私は、当時はガラケーですね。ガラケーいじりながら、向こうから聞こえてくるそれに耐

えながら。耐えながらじゃないですね。無意識的に別のことに集中しよう。フォーカスしようという形で耐えている私がいる。そういうある種、日常風景が、今の表現にすると、すごく灰色に見えるんですよね。家に帰ればそう。じゃあ学校ではどうか。小学生の頃はね、ハーフっていいなって言われてました。ハーフっていいな。すごくいいよね、みたいな。中学生になって、なぜか、あ、フィリピンだから、東南アジアの出身だから自分たちより下だみたいな感じのことが。そういったものが自分と関係なく、急に上げられたりさげすまれたり。すごく消耗していくんですよね。私、中学校の頃の卒業アルバム受け取ってません。小学生の時の卒業アルバムはまだ、かわいらしくニコニコして映っていたかもしれないかなと思うんですけれど。中学生の頃の卒業アルバムは私受け取ってません。すごくすごくすごく、消耗していたと思います。私自身の子どもの頃を想起するとそれが蘇ってくる。それは決して過ぎた話ではなくって、今この時間、このとき、この社会のなかで耐えている人がいることを私は想像してほしいと思うんです。私は、外国にルーツを持っているということに加えて、私は生活困窮という課題がありました。一時期、本当に食べるものがなくて、特殊な環境だったんですけれど。母がいなくて、母の彼氏が時々家に来て、お金を渡すっていう生活をしていたんですけれども。母の彼氏が母にどういうことをやってきたということを知っているんで、そんな人間からお金を受け取りたくない。というところで私は、家が散らかってたんでね。洗濯機の裏とか探すとね、100円玉とか50円玉とか出てくるんですよ。床の下の奥の方とかね。そういったお金を使って、ポテトチップス買って晩御飯にしたりとか。友人宅、すごくありがたいと思うんですけれども、そこでスナックパンとかね。もらったりとかして過ごしていたところがありました。そうした生活困窮や専門用語になりますけれど、そうした父が母をDVしている、面前DVですよ。生育歴的な課題というのが生じる部分でもあります。かつ外国にルーツがあるというところで。私当時ね、何を思っていたかというところ。日本人以上に日本人にならなきゃいけない。という風な気持ちを持っていたんですよ。私がこうして母が苦しんでいるのは、私が苦しいのは母のせいじゃないし。じゃあ一体なんなんだ。日本人じゃないからこういう状況に、私はあるのかな。だったら、先ほどの、ルーツがあるという部分で持ち上げられたりさげすまれたり。日本人以上に日本人にならなきゃいけない。私当時のね、よく読んでいた本の一つが石原慎太郎の『日本よ』という本。すごく日本人になりたいなという気持ちが強かったんです。

一方で、私自身がほかの人に対していじめ加害的に接するということもありました。暴言を吐いて、攻撃してということもありました。交差している部分もあった。そうした…すみません。どうしてもこのときの語りになるとね、言葉が飛ぶんですよ。今33歳ですけど、いくつになっても当時のことを思い返しながら話そうとすると飛んでしまいま

す。ごめんなさい。率直に申し上げます。先ほど書いたメモがあるので、それを読ませてください。

日本人以上に日本人にならなきゃいけないっていうね。私は気持ちを持っていましたけれども、そもそも日本人外国人って、もともとつくられたものですよね。開発されたことであるわけです。別に元からそうあるわけではない。先ほどのスポークスパーソンの話のなかで、生活保護の話がありましたけれども、たとえば在留資格によってそもそも生活保護使える使えないということがあるわけです。生存権という部分。憲法 25 条で定められてますけれども、そもそも在留資格によって生存権が保障されない。これ社会保障、ソーシャルワークでは当たり前のように最後のセーフティネットは生活保護ですよ、と出てます。でもそれが保障されない。という課題が一つありますね。

二つめに、在留資格によって常に追放可能性に怯えないといけない。いつこの日本社会から追い出されるかわからない。例えば、昨年ですけれども、入管法改定がありましたね。そのなかで、永住権の取り消しの部分が決められました。このことね。私が母に話すとかやり取りする前、母から私にね。私は社会活動的なところに第三線で関わっていますけれども、母は特段、社会活動してません。母が不安げに言ってきたんです。「永住ってずっと続かんのかな。取り消されるかな。」っていうことを友人から聞いたっていうね。追放可能性。いつこの社会から追い出されるかどうかかわからない。そもそもこの社会から不要な存在であるということの不安を常に内在化しないといけない。もたざるをえない。二重の矛盾・課題があるわけです。かつ同化同調圧力として日本人以上に日本人にならないといけないという気持ちを負わざるをえないというところがあります。

多文化共生スポークスパーソンの皆さんのお話に、居場所という言葉が出てきましたけれども。いきなり行政的な話に飛びますが、例えば、孤独孤立対策推進法というのが施行されています。いろんな状況で孤独孤立を抱えている人たちがいて、取り組んでいくことが目的の法律です。何が言いたいかというと、ともすれば、外国ルーツである私は居場所が必要だ、居場所は大事なんだということに気付いた。そこに対するマジョリティ側の反応が、「私はずっと我慢してきたんだ。居場所がなかった、なのになぜあなたたちだけ優遇されるのか」みたいな反応を示すかもしれない。それは、何か別の課題やしんどさを抱えているかもしれない。自分は我慢しているからあなたも我慢すべきだという論法ではなくて、あなたも居場所を求めているし、報われるべきなんだっていうことが私は必要だと感じています。

居場所もほかの社会的ニーズもそうですが、個別性か普遍性かという対立構造ではなく、外国ルーツをはじめ、社会的マイノリティの状況を抱える人々の課題の個別性と、外国ルーツだけではないほかの課題の複合性・交差性・歴史性・普遍性のいずれも重要です。

時間も迫ってきたので、いきなり話が飛びます。

私は最後に根本的な、普段あまり考えないであろうことの思考を皆さんとめぐらせたいと思います。

私たちは日本社会に生きるなかで、2つの当たり前を自明のように使って生きています。それは、資本主義と国民国家です。皆さんは日常として、モノやサービスを買うなどの消費者性や、就職活動を頑張って今の職場に入って、モノやサービスを提供するなど、労働者性を担っているかもしれない。これらの売買は利潤の追求のもとで、国民国家の統治による規制や介入の上で行われています。資本主義という経済の仕組みと国民国家の統治は、私たちは当たりまえのものとして、利便性もあって、両方の仕組みのなかで私たちは生きているわけです。しかし、絶対ではありません。どちらも人間が開発したものです。何かのときに矛盾が生じるかもしれない。

先ほど追放可能性について話しましたが、国民国家の構成員の枠外の対置として、外国人というつくられた概念で、あなたはこの社会からいらない人間なんだっていう風に告げられるやもしれない。あるいは、資本主義の負の側面である所得格差などの社会課題に対して、社会保障などの仕組みがありますが、「自分たちだけが社会保障を使えるべきであって、なぜ、あの人たちになぜ提供しなければならないのか」そのままの言葉で言うと「外国人に提供しなければならないのか?」と排他的になるかもしれない。

所得格差などの社会課題が生じる是正措置として、経済活動への課税を財源として、社会保障などの公共サービスによる再分配があります。再分配を求める富裕層ではない人々と、少ないほうがよい富裕層にある人々のコンフリクトが、国民と外国籍の人たちの間の課題にすり替わってしまう。この部分はある時期に必ず高まります。

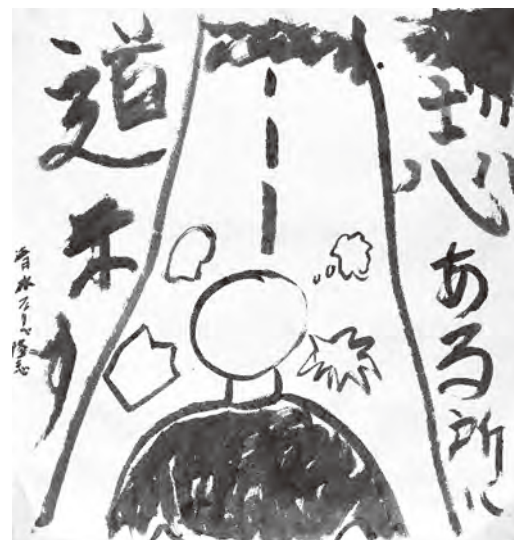
大切なのは、ここに生きている人。私やあなたが共に過ごしていることについてどうしていったらいいのか、っていうところから、思考しないといけない。この国家を守るためには、あの国家を守るためには、という思考から離れて、今ここで生きていることから出発しないといけない。

余興的にお話しさせていただきました。ありがとうございました。

ラボルテ氏の講演を受けて

1 番印象に残ったことは、日本人以上に日本人になる必要があるという部分。僕も共感する。日本で生活するには、みんなのように、友達のようにならないといけなかった。それは、自分のルーツを捨てることになる。最近僕のいところが帰化した。日本国籍をとることは、ミドルネームを捨てること。ミドルネームという分類が日本にはないから。僕も日本で生活するために帰化するつもりではいる。でないと生きていけないから。自分の名前の一部を捨てる。そういった意味でも僕たちの声を聞いてほしいし、もっと皆さんと一緒に、共生する社会を実現したい。(フェリペ)

在留資格によって生存権が保障されないのはおかしい。全員が保障されるべき権利、生きる権利。どんなバックグラウンドを持っていても、命が同じように尊重されて守られる社会になっていくべきだと思う。そういう社会をつくるためには、投票権のある人たちが投票に行って声をあげること、投票権がなくても、声をあげるチャンスがある人たちが社会に訴えていく必要がある。もっと社会に声をあげていきたいなと思いました。(メラティ)



第3回合宿 書道ワークでの絵(フェリペ作)

④「行政・教育・当事者の対話 ～当事者の声を直接聞いていますか？」

50 分間、4, 5 名ずつ 6 つのグループに分かれてディスカッションを行った。その後、スークスパーソンがグループを代表して話した内容を共有した。

クエスチョン

1. あなたが思うあなたが所属する組織(所属がない方はあなた自身)共生に向けて取り組んでいることは何だと思いますか？
2. 職場や学校など、あなたが所属する組織(関わったことのある組織)において共生の実現に不足していることは何だと思いますか？
3. 共生の実現に向けて、今後取り入れたい取り組みはありますか？

【ディスカッションの狙い】自分をオープンにして互いを受け入れ、相手のことを心から理解しようと耳を傾けたことが合宿での居場所形成につながった。ディスカッションを通じて、普段異なる組織に所属する人間が互いの視点から社会をみる、それぞれが持つ違いを苦しみではなく喜びとして捉えることができるのではと考え、この時間を設けた。

【各クエスチョンの意図】

- ①所属している組織で取り組んでいることはあるが、私自身はそれがあまり共生の役に立っているとは思わない、どうなんだろう?というようなことを率直に、肩書を取り払ってお話してほしい。
- ③今日話を聞いてしてみたい、してほしいと思ったことを率直に。個人的な観点からでも、組織の一員としての観点からでも構わない。

1 グループ(ひま)

- ・質問③に対する答えはでなかった。
- ・金銭面での制限などもあるなか、寄り添い、共感、想像力といった支援対象の感情的な部分を重要視して、日々の活動に取り組んでいることがわかり嬉しかった。

2 グループ(メラティ・フェリペ)

- ・大学内の多文化共生が進んでいる。地域で共生を考えるコミュニティもできている。
- ・足りていないのは外国にルーツをもつ人々に配慮した入試制度。ニーズと供給が合っていない。
- ・個人が見えるストーリーベースの対話があったらいい。オープンマインドで話すための関係構築のために硬くない話ができるコミュニティが大事。

3 グループ(たかや)

- ・共生＝日本語指導になっている。外国ルーツの生徒が日本社会で生き残る上で日本語力は大事。だが、日本語ばかり学び、母語がおろそかになった結果、親とのコミュニケーションに問題が生じるなど負の側面もある。
- ・マイクロアグレッションのパンフレットづくりの取り組みは、心地よいコミュニケーションをする上で助けになっている。同時に、見えにくい差別を見つけることは、「あれもこれも差別になるのではと皆が委縮してしまうこと」ことでもある。僕自身も閉じこもってしまった。表現の自由とマイクロアグレッションのバランスをとることが大事だなと思った。

4 グループ(アイシャ)

- ・自分と同じように皆さん不満を持っているんだと分かって、よかった。
- ・個別では共生に関する取り組みをしているが、上の人間が国の問題だと終わらそうとすることもある。個別対応をしても批判されることが多い。そもそも制度や組織の受け皿がちゃんとしてない。人手も足りていない。結果、外国にルーツを持つ方たちにもそこまで支援がいてない。
- ・取り組みたいことは情報交換。言いたいことをできる限り言う。対話して、外国にルーツを持つ方たちに興味を持ってもらうことが大事。

5 グループ(なほ)

- ・取り組んでいることは、外国人に日本語を直接教えるだけでなく、日本語を教える人の養成方法について伝える場をつくること。直接的だけではなく、間接的に支援の輪を広げる取り組みになっている。
- ・外国にルーツを持つ人たちの理想はそれぞれ違う。日本人、外国人に関わらず、相手を自身の理想に当てはめるのではなく、それぞれが思う幸せをくみ取れることが必要だという話が出た。

- ・排外的な考えを持つ人たちは学校や議員にもいるが、そういう人たちにどうアプローチするか。こういうことで苦しんでいるということを届けられないといけないし、市や県、国などの行政の人たちに助けてもらわないといけない。助けてもらうって言い方は嫌なんですけど、そうせざるをえない。

6 グループ(たすく)

- ・取り組みの一例として、母語による支援と日本語による支援があった。そもそも、日本語の支援をすることは、日本人への同一化を強いる可能性をはらんでいる。しかし、日本で暮らしていくうえで、日本語ができることは個人の安心安全にかかわる。こういう現状を変える上でマイノリティだけではなく、マジョリティも巻き込んでいかなければいけない。外国やマイノリティに接点がない人に外国人の存在を知ってもらう、関心を持ってもらううえで、3Fも有効。
- ・行政の方からの意見で、行政ではどうしても法律といったスケールの大きい話しか展開されない部分があるが、実際に今生きている人たち、マイクロレベルの話をマクロに届けることは有用だという言葉があり、こうした場を増やしていけたらなと思った。

今井氏によるまとめ

- システムが巨大化している。組織や肩書、お金の問題、法律、資本主義、国家とか。巨大なシステムのなかで固まってしまう身動きができなくなってしまう。まずは、こうした場で個人対個人として出会った人たちが声を届けていく。制度と制度の狭間で動く。そういったなかでシステムを変えていけたらいいですね。
- 日本語と母語指導。どちらも大事。では、複言語・複文化にしてはどうだろうか。日本語か母語かみたいな二者択一じゃなくて、自分たちで自分たちの言葉をつくっていく。今日のなかで心に響いたのは、言葉を変えて社会を変えるということ。大きなすてきな言葉を言ってるんですよね。自分たちで言葉をつくって、それで社会を変えていこうっていう。ゆえに複文化・複言語。自分たちの社会にあった言葉をつくっていけたらいいなって思いました。

⑤ワードクラウド

ワードクラウドとは、個人の言葉を集計し、色や大きさに頻出する単語を視覚化するツールである。個人のデバイスで単語を入力すれば、専用のソフトが解析し、共通する言葉ほど大きく表示される。

本フォーラムでは、「共生を進めるにあたって足りていないと思うものは何ですか?」をテーマに、フォーラム開始前、ディスカッション後の2回行った。

本誌表紙がフォーラム前、裏表紙がフォーラム後に抽出した図である。

前後の変化について、共生スポークスパーソンからは、「尊重、行動、行動力などの言葉が増えている。最初と比べて行動しようと思う人が増えたようですごくよかった。(たかや)」や、「共生を進めるために必要なものについて議論する際、予算の問題を真っ先にあげる人がいると「え～」と思っていたが、2度目のワードクラウドの結果をみて、そうした人たちも問題だらけの現状を「変えられる」と思っていることが分かり素晴らしいなと思っていました。(ひま)」などのコメントが出された。

⑥総括

当事者の声が反映されるシステムも大事だと思った。外国にルーツを持っている人たち、帰国子女などに興味を持ってほしい。フォーラムの参加者は、興味を持っているから来てくれた。どうすれば、今回参加してくれていない人たちにアピールできるのかを考えるという課題ができた。(アイシャ)

構造や差別には複合的な要素があり、知れば知るほど解決は難しいと思っていた。差別に気付かない、社会学的なことを学ぶ前の方がなにも考えずに済んでいて、それはそれで楽だったと思うこともあった。しかし、プロジェクトを通して、それは間違っていると改めて思った。差別をなかったことにできるのも自分たちで、なかったことにしない・させないのも僕たちにできること、僕たちの責任なのかなと思った。(たすく)

50分では足りないくらい問題点が溢れかえっているとディスカッションで改めて気付かされた。フォーラムのような場が普通の生活のなかにあること、知らない人、普段関わらない人たちと「これについてどう思いますか」と話す機会が必要だと思った。私も次のステップとして何かつくっていったらいいなと思った。大学生の間に、一歩、一つ新しいものができた。本日は、足を運びいろんなことを共有してくださってありがとうございました。(なほ)

(3) 当日の感想・反省

オキーレ 賛



まず、反省すべき点の一つとして「時間の設定及び調整」というものが挙げられる。フォーラムは 13 時から 16 時 30 分にかけて行われたが、その内でディスカッションが占める時間は 45 分と大変短かった。そのような状況下で、参加者に 3 つの質問を投げかけ、それをまとめ、全体で共有するということには、やはり無理があったように思われる。時間が足りないと感じたのは、ディスカッションだけでなく、フォーラム全体においても同様である。共生を願う若者が今伝えたいことでは、緊張や自身の思いに耳を傾けてほしいという熱意から、割り当てられた発表時間を超過してしまう共生スポークスパーソンが少なくなかった。その結果、せっかくお越しいただいた今井さんやラボルテさんに、各々の発表時間の大幅な短縮を迫ることとなった。これはお二方に大変失礼なだけでなく、お二方のご講演で共生スポークスパーソンの訴えの妥当性を補強してもらうという、お二方をお招きした本来の目的も果たせなかったという点において、非常にマイナスであったと言える。

また、共生を願う若者が今伝えたいことにおける主張に具体性が欠けていたことも改善点の一つである。「現代社会の『共生のあり方』に対するモヤモヤ」や、その背景について述べるパートでは、これまでに経験・学習したことから考えた事柄を各々の言葉で表現できていたと感じる。しかし、そうしたモヤモヤを解消するため、教育・行政関係者に何を望むのか、彼らの協力を得た上で、私たちが何をしたいのかという点が漠然としすぎていたように思われる。ディスカッションの質問には、「私たちの発表を聞いた上で、今後実施したい取り組みはありますか？」というものがあったが、やはり、この質問では回答に時間を要する参加者が多く確認できた。いきなり私たちの話を聞いてどうしたいと思ったかを聞くのではなく、こちらが先に何かしらの具体的アイデアを提示した上で、その実現可能性について質問するなどしていれば、参加者も答えやすくなり、ディスカッションの限られた時間を有効活用できたのではないかと考える。

上記の通り、今回のフォーラムは決して完璧などではなく、粗削りな要素が各所で見られるものであった。しかし、それはこのフォーラムが共生スポークスパーソン自身の手で作り上げられたことの何よりの証左である。今回の経験を糧とし、「多文化共生社会」の実現に寄与できるよう、これからも努力を重ねていきたい。